

## 大田蜀山人

和5年6月4日(日) 10:00~11:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

### はじめに

大田蜀山人は大阪銅座の役人として、住友家が18世紀はじめに作った銅の採鉱から精錬までの解説書である鼓銅図録の題字「大鈞鼓銅」を書いた人である。鼓銅図録の一点でのみ別子銅山と関係している幕臣である。抱一の句集「屠龍之枝」の跋に突如とし出てくるなど、江戸時代を書いた本を読んでいると文人・狂歌師として、たびたび登場してくる。戦前までは、一休さん、曾呂利新左衛門とともに頓知話の主人公として知られ、広く流永していた蜀山人伝説があった。永井荷風も江戸の大教養人として、新井白石、荻生徂徠とともに挙げて思慕し傾倒した大田南畝・蜀山人である。落語の演題にも「蜀山人」があつて、立川談志が高座にかけていたが、どんな人物であろうか。

※大鈞鼓銅：お天道様が銅吹をしているとの意味。

抱一：姫路藩主の酒井家の第二子に生まれたが、西本願寺で得度した俳諧師。

抱一の代表句「布団着て寝て見る山や 東山」

跋：あとがき

### 1. 生い立ち

寛延2年(1749)3月3日、江戸牛込御徒町に、幕臣の御徒として70俵5人扶持の大田吉左衛門の長男・直次郎として生まれる。名は覃。タンと読み慣わしているが、正しくはフカしと読む。御徒とは、將軍外出の時に徒歩で行列を作るのが主要な仕事で、江戸城内に番兵として勤務することもある。御家人にとって、派手で物価高の江戸での暮らしは楽ではなかった。仕事そのものは役に就かない限り、毎日の出勤はなかった。小鳥飼いや盆栽づくりの内職もできた。器用なら書家画家として一家をなす者少なくなかった。

俊秀としての片鱗を示す直次郎に両親は期待を寄せる。母親は、8歳になると多賀谷常安という師匠をつけて漢文素読を習わせた。直次郎があまりにもよくできるので、もっと立派な先生に就けるように勧められ、蜀山人は15歳で和学漢学を兼ねた内山賀邸の門に入る。早熟な天才は、このころから「詩経」大田篇から取った「南畝」を雅号に用いる。旺盛な知識欲と卓越した記憶力ですぐに頭角をあらわした。門人には幕臣も多くいて、身分違いの高級幕臣とのとの深い交友関係は、後々に大きな意味を持つてくる。中でも23歳年上の煙草屋を営む稲毛屋金右衛門(学者名：立松東蒙、狂歌師：平秩東作)という町人の変わり者との親交は、20年以上にわたって続く。また奇人・平賀源内とも仲が良くなり、才氣煥發<sup>かんぱつ</sup>ぶりやふざけぶりを学んだ。

17歳で父と同じ御徒として出仕する。

秀才の大田少年は、漢詩漢文に習熟していた。18歳で作詞用語辞典「明詩擢材」を上梓する。田沼時代では堅苦しい儒学、真面目くさった漢詩は時好に合わなかったので、狂詩狂文を作り、狂詩集「寝惚先生文集」を記したところ、出版屋が出版を懇望した。19歳で寝惚先生の誕生となる。この狂詩の草稿は、17歳の時に平秩東作に見てもらっている。そして平賀源内が序文を寄せている。後年には、東の寝惚、西の銅派と狂詩界で並び称されることとなる。

狂詩の流行にも限界があった。20歳ころから蜀山人は狂歌の会にも顔を出していたが、当時流行の洒落本や噺本を小遣稼ぎの仕事として書いた。27歳の山手馬鹿人の誕生である。8編ある洒落本の中の「変通軽井茶話」は、十返舎一九がこれを模倣して「東海道中膝栗毛」を書く。平賀源内が亡くなった後には、先輩の略伝を書いている。この間、23歳で理与と結婚する。

蜀山人の才能にぴったりだったのは狂歌であった。狂詩は純粋な漢詩ではなかったが漢字で作るために相当な教養が必要であった。狂歌は和歌の古歌の作り替えなので日本語で詠めばいい分楽に作れた。上方で流行していた狂歌は、宝暦から明和にかけて、突然江戸に流れ込んできた。それも内山賀邸塾に入ってきたのであった。どうも賀邸が上方に旅行して大阪で習ってきたようである。内山塾から、蜀山人<sup>よものあから</sup>四方赤良、朱楽菅江、唐衣橋洲が出て「狂歌の三大人」と言われるようになる。天明には四方赤良の人気は絶頂に達する。最初の狂名は四方赤人であったが四方赤良とする。四方の赤は、日本橋の四方酒店で売る赤味噌のこと。「あから」は「赤ら顔」の意を込める。(高田の月見では、俳人の大島蓼太が、「高き名のひびきは四方にわき出て赤良赤良と子どもまでしる」と南畝に狂歌を贈っている。)

四方赤良の巴扇屋<sup>はせんや</sup>四方七社中<sup>よもしち</sup>には、旗本、御家人、江戸詰めの諸藩士も名を連ねていた。渡辺崋山も出入りしていたと本人がいていた。市川団十郎を中心とする歌舞伎グループと吉原グループも加わっていた。四方赤良の絶頂期も田沼意次の失脚から、田沼派の要人でパトロンの土山宗次郎が死刑を受け、土山の懐刀であった、友人の平秩東作も処罰を受けた。土山屋敷に出入りしたてた四方赤良は身の危険を感じた。江戸市中の落首の作者として嫌疑を受けたので一大決心して狂歌界と絶縁した。狂歌及び戯作と手を切った蜀山人にとって、寛政の改革は人生の暗い谷間となっていく。一番大きな楽しみとアルバイトを失った。

44歳で第1回学問吟味を受験するが、蜀山人を快く思わぬ試験官がいて落第する。46歳で第2回学問吟味の試験では、その試験官が転任していて首席で合格する。学問吟味とは、中国の科挙の制度に習った試験で、寛政の改革での旗本・御家人から人材掘り起して役人として登用しようとするものであった。48歳で支配勘定になる。禄も30俵増え100俵5人扶持となる。譜代の待遇を受けることとなる。

幕府4百万石の財政を預かる御勘定所は、勝手掛老中の下に勘定奉行5人が配されて管理されている。奉行の下は勘定組頭—勘定—支配勘定—普請役元締—普請役—湯呑所となっている。

50歳の時に妻の里与が亡くなる。

寛政11年(1799)正月、51歳で大阪銅座御用の命が下るが、親孝行者を全国から探し出して表彰し、その略伝を取りまとめる「孝義録」編纂が命じられて、大阪出張直前に取り消される。「孝義録」出筆の昌平黻の教授たちは漢文の大家であったが日本文が書けなかったので、昔の遊び仲間の蜀山人を出筆者に推薦した。

寛政13年(1801)正月、53歳で大阪銅座御用の命が改めて下る。御勘定奉行を初めとして関係屋敷に挨拶を済ませ、2月27日に牛込御徒町の自宅を出発する。大田直次郎の出張には旗本として12人のお供がつき、本人は駕籠に揺られて上っていく。宮から桑名へは尾張藩が大船を出して蜀山人一行を運んでくれた。3月11日に大阪に着いた。

大阪に赴く年の元旦に詠む詩

<b>城頭白水遠山青</b>	城頭の白水遠山の青
<b>袞々諸公上漢庭</b>	袞々たる諸公漢庭に上る 袞々：絶え間ない様
<b>世路如経東海道</b>	世路東海道を <sup>ふ</sup> 経るが如し
<b>人生五十有三亭</b>	人生五十有三亭

大阪の蜀山人は、南本町5丁目に住んだ。土佐堀川沿いの過書町の銅座にほとんど毎日出勤した。銅座での仕事は、朝8時に出勤して業務監督と書類の決裁であった。午後の2時過ぎには仕事は終わった。後の時間は自由に過ごせた。安治川での銅船視察、銅精錬所の吹屋見回りの外出もあった。銅座へ派遣された権限は大きく、到来物、お供物が多くて結構な生活が楽しめたが、役得をむさぼることはなかった。南畝のあまりの清廉潔白さに周囲は戸惑うくらいであった。前任者は江戸に帰る路賃を後任者から借りて、踏み倒すケチな小役人の悪風習があった。江戸帰着後もなかなか7両を返さない輩であった。帰宅すると茶を入れ、机に寄りかかって書物を読み、抄書を下したり詩を賦したり、手紙を書いたり、日記をつけたりした。江戸にいる時と違って、うるさい客がやってくることもないので、極楽という気分であった。人一倍好奇心、探求心が旺盛な性格は、健脚に任せて大阪探訪にも明け暮れた。大阪では、その名を慕ってきた難波の文人たちとも親しく交わった。中でも木村兼葭堂<sup>けんかどう</sup>との交際は格別のものであった。大阪に来て上田秋成の奇文を読み、京都から大阪に出てきた時に会っている。蜀山人の号は大阪で書を乞われた時に、銅座に勤務していたから、銅の異名蜀山人居士にちなんで署名したのに始まる。

享和2年(1802)、出張期間が満了して後任の高橋儀右衛門と交代し、3月21日に大阪を立つ。中山道を経由して4月7日に江戸の自宅に着く。そして小役人の生活に戻る。

一時の号として蜀山人と名乗ることとしたことを、山内尚助宛ての書簡で述べている。

**「人間に落候事を恐れ、銅の異名を蜀山居士と申候間、客中唱和等に暫相用ひ申候。  
不知者以為真号。呵々」**

※清国の「事物異名録」に銅の一名を「蜀山居士」とするのが典拠と考えられる。

冬至書懐 (銅座での1年を振り返っての感慨の詩)

至日陰陽往又還 冬日陰陽往きて又還る  
春来祇役浪華間 春来たるも浪華の間に祇役す  
官銅主管朝趨局 官銅の主管朝に局に趨き  
客舎平居夕閉関 客舎の平居夕に関を閉ざす  
屈指前期添一線 指を屈すれば前期の一線を添え  
回頭片雨過千山 頭を回らせば片雨千山を過ぐ  
終年飽喫太倉米 終年飽くまで喫ふ太倉の米 尺寸：すこし  
尺寸無功慙靦顔 尺寸功無く顔を慙靦す 慙靦：恥じて顔を赤らめる

享和3年(1803) 55歳で残り人生を15年と見積もり、狂歌師に戻り遊興また行楽の生活を謳歌する。

文化元年(1804) 2月小石川鶯谷に移る。御徒から勘定方へ転任した際に宅地を賜るはずのところが、実現しないので買ったのである。56歳の6月に長崎奉行所詰めの命が下る。

長崎に赴くにあたっての詩

五十余年任拙工 五十余年拙工に任す 拙工：へたな  
行蔵共比信天翁 行蔵共に信天翁に比す 行蔵：不器用 信天翁：アホドリ  
自今縦ひ貧泉水 今より縦ひ貧泉の水を酌むとも 貧泉：役得を貪る長崎の地  
不変夷齊百世風 夷齊百世の風を変ぜじ 夷齊：伯夷、叔齊(清廉の人)ワレビ、食わずに餓死した聖人

狂歌一首

玉ひろふ 浦としきけば 白波の かけてもふまじ 浜の真砂地

※「浜の真砂」は石川五右衛門の台詞。長崎奉行は泥棒のように役得との定評で、人々の羨望の的であった。役得は年間一定量の輸入品の先買い、書物は入札価格の半額以下で求める特権。

7月25日に旗本待遇で人足のほかに侍3人と中間2人を従えて、江戸を立つ。更には8月18日に大阪着くと上田秋成が訪ねてきた。その日に大阪を立ち9月10日に長崎に着く。途中の周防灘で台風に遭遇して風雨に翻弄されて体調を崩す。長崎の勤務は、長崎会所の監察で、貿易業務だけでなく、あらゆる業務を厳格に担当していたので、大阪銅座とは違って大変な激務であった。朝9時に出勤すると、仕事に追われて異国文化の一端に触れて視野を広める暇など全くなかった。長崎奉行に到着するやロシア使節レザノフと対応してい

る。任期の半分をロシア船に翻弄された半年でもあった。任を終えて文化2年(1805)10月10日に長崎を立つ。11月1日に大阪に着く。途中、京都の南禅寺で上田秋成に再会している。そして11月19日に江戸に着く。

江戸に帰ると文壇の大御所として迎えられる。寛政の改革者の松平定信にも隠居の身になると、画師・谷文晁と蜀山人を風流の相手として招いている。重箱の隅をつつくような神経質な政治方針の寛政の改革が進行して、各方面から反感が高まっていた時に、蜀山人は「世の中にか(蚊)ほどうるさきものはなし、ぶんぶ(文武)ぶんぶと夜もねられず」と皮肉っていた。

61歳で大久保に移る。

64歳で駿河台に移る。

71歳で七左衛門と改名する。

文政6年(1823)4月6日、支配勘定勤務のまま脳溢血で没す。75歳。

(息子が跡目を継ぐがノイローゼになる。孫が独り立ちするまで病身で頑張る。亡くなくても理解ある上役たちのおかげで次男が仕官するまで2年間禄をもらい続ける。)

絶筆となった歌

うかりつる ながめもはれて おのが名の 春もかすみて ともに行くらん  
ほととぎす 鳴きつるかた身 はつ鯉 春と夏の 入相のかね

## 2. 名前の数々

もとの姓は藤原であつたらしいが大田氏と称し、名は<sup>たん</sup>覃、字は<sup>しし</sup>子耜。(覃は、深い・広い・鋭い)(子耜は、小さい鋤) 一般に呼ぶ通称は直次郎。晩年には、徳川家斉の第21子が直七郎と名づけられたので、「直」の字を避けて七左衛門と改名する。号の南畝は、若い時から使用していて広く知られるが、杏花園、杏園の堂号が用いられることもある。狂詩を作るときは、<sup>ねぼけ</sup>寝惚先生、<sup>よもの</sup>四方山人、<sup>しんねい</sup>新寧武子を使う。洒落本の作者としては、<sup>ふうれい</sup>風鈴山人、<sup>やまてぼ</sup>山手馬鹿人、<sup>なんろうぼうろせん</sup>南楼坊路銭。狂歌師としては<sup>よものあから</sup>四方赤良が有名である。<sup>ちくら</sup>舩羅山人、<sup>らしゅう</sup>馬鹿羅州阿林子、千金子、改年堂御慶、新場老漁の名前も出てくる。いろいろな名前の持ち主であるが、他にもるようである。

一般には、大田直次郎、南畝、四方赤良、蜀山人の4種類が知られている。

## 3. 蜀山人の4区分

- ① 小年時代 70俵5人扶持ちの徒士の家に生まれた。貧しい下級幕臣であった。生家が貧しく、身分が低く、幼時から英才を認められたが、屈折した心理がもたらされた。
- ② 四方赤良時代 平賀源内の刺激を受け、まじめな漢詩を崩した狂歌が受けていっぺんに有名になった。江戸での狂歌連のリーダー的存在に成長する。洒落本、黄表本、評判記を手がけてオールランドに活躍する。江戸天明期のチャ

ンピオン的存在となる。背景には田沼時代があった。

- ③ **寛政改革による自肅期** 松平定信の改革政治は文芸統制を実施し、戯作者たちが法網にかかり、周辺では係累者が続出したが、南畔は巧みに身を処して無事であった。改革政治の一環の学問吟味に応募して転身に成功する。勘定方に抜擢されて能吏の道に進む。
- ③ **蜀山人時代** 大坂の銅座に出張する。銅の異称の「蜀山居士」から「蜀山人」を自称する。役人生活に波風が立たず知名度の高まりと共に、交友関係は広まり、大名の会合にも招かれるようになる。長い後半生が平坦に続く。

#### 4. 幕臣としての世界観

「唐は唐。日本は日本。唐の紙屑ばかり拾ひて日本の刀を忘るることなかれ。道なかに立つの市人切りすてて股はくぐらぬ大和魂。杏花園」は、「韓信股潜図」（かんしんまたくぐりのず）の賛である。杏花園は大田蜀山人の別名である。

江戸期に日本のインテリは思想面で脱中国を始めた。山鹿素行「中朝事実」が早く、日本こそが世界の中心、すなわち中朝とまで言った。「日本の小中華思想」と歴史学会では呼ぶ。熊沢蕃山も中華崇拝を否定している。本居宣長の「からごころ」批判は有名である。

「中国の書物は紙屑である。日本の刀を忘れるな。無礼者は切り捨てて股は潜らないのが大和魂である。」韓信が若い時、長剣を帯びていたら市中でチンピラにからまれ、喧嘩を避けるために屈辱的だが股を潜った。この辛抱が功を奏し、後には大將軍、斉王に出世した。劉邦が漢を建国できたのは、韓信の軍事的天才によると言われている。

蜀山人が長崎奉行所に出張滞在していた時には、唐人屋敷の中国人とも交流している。なかなか表面には出てこない蜀山人の幕臣としての激烈さが出ている。

#### おわりに

たまたま西条市の古書店で、日本の旅人としての大田蜀山人の本を見つける。旅人の紹介で経歴を読んで、おぼろげに「大鈞鼓銅」の揮毫者に迫る。偶然にして松山市の古書店で、人物評伝としての大田南畝を見つけて加筆する。レジュメが完成した時に、たまたま松山市の別の古書店で江戸の文化人としての蜀山人・南畝に出会う。太平洋で木片を見つけるように、補強の加筆をする。疎から蜜へと従順に読めたのが奇遇であった。

大田蜀山人は、漢詩、狂詩狂歌や黄表紙洒落本などの著者として沢山の名前の持ち主であった。役人暮らしの憂いを晴らし、雅友との交際を楽しみ、遊女に惚れ、家族愛を語り、下積みの鬱憤を洩らし、世間をちょっぴり諷刺した作風で江戸っ子の人気を集め、晩年は江戸文壇の大御所として一生を終えた人である。同時に下級幕臣として生真面目な役人生活を送った人生も欠くことはできない。清廉潔白を旨とし淡々と事務をこなす反面、軽妙洒脱な文章を生み出し、一人で二人分を生きた人であった。大阪銅座勤務の時に鼓銅図録の表題を揮毫することとなったのも、当時の文化人としての人気ゆえの依頼であった。

新居浜は、銅を触媒としていろいろな方面につながる特異な街である。